訪日教育旅行いっそうの進展を

日本修学旅行協会第7回「教育旅行シンポジウム」

風評克服を最優先に

国の「安全宣言」が不可欠

日本修学旅行協会は8月23日、第7回「教育旅行シンポジウム」を東京都墨田区の江戸東京博物館で催した。「訪日教育旅行のいっそうの進展をどう図るか」をテーマに、海外政府観光局や学校、地域の関係者がパネルディスカッションで討論。東日本大震災と福島原発事故によって訪日教育旅行が激減するなか、その現状の打開には「国の安全宣言が不可欠」と意見の一致を見た。

諸外国から日本への教育旅行の大幅な減少は、日本の青少年にとって国際理解教育や国際交流の機会が少なからず失われていることを意味する。今回の教育旅行シンポジウムでは、震災などを乗り越えて風評被害に左右されずにどう訪日教育旅行を実施するかを論議していった。

パネリストは、范巨灵・中国国家観光局首席代表、權炳典・韓国観光公社東京支社部長、星野喜代美・東京都立白鷗高等学校校長、京田伸吾・長野県須坂東等学校校長、牧野文成・群馬県観光国際協会事務局長、土井正隆・長崎県観光連盟専務理事の6人。河上一雄・日本修学旅行協会理事長がコーディネーターを務めた。

訪日教育旅行を受け入れる地域からは、群馬県が「インバウンドの修学旅行は台湾からが多い。5月を中心に13校の予定があったが、全部取り消しになった」（牧野氏）。九州も「中国からの夏休みの教育旅行は壊滅」（土井氏）と厳しい状況が報告された。

一方、送り出す側として權氏は「ここまでは安全という明確な基準を日本政府や信頼できる原子力関係機関がデータとして示さない限り、日本に来られない状況は続く」と指摘。范氏もこの意見に同意したうえで、「例えば、福島から沖縄までは、中国に当てはめると北京から広東以上も離れているとか、距離を比べてみて、海外の人々に日本の安心、安全を分かりやすいように説明するのも1つの方法」と提案した。

受け入れ側と送り出し側の双方が意見を交わした

山中に残る戦争の傷痕

長野市 松代象山 掘り巡らされた地下壕

長野市は、戦時中に建設が進められていた松代象山地下壕を太平洋戦争の遺跡として多くの人に知ってもらい、平和学習の素材として活用してもらおうと、一般公開を行っている。

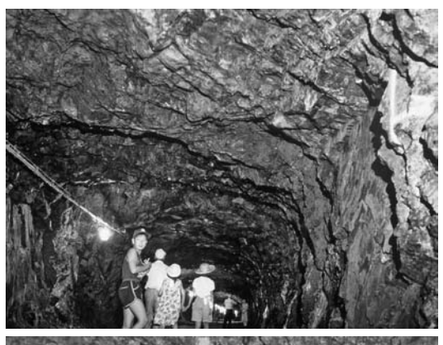
松代象山地下壕は太平洋戦争の末期、軍部が本土決戦最後の拠点として大本営、政府の各省などを松代に移すという計画のもとに極秘のうちに造られたもの。

その着工は昭和19年11月11日午前11時。工事期間は、終戦日となった翌20年8月15日までの約9カ月間で、全工程の75%まで進められていた。当時のお金で約2億円という巨費を投じ、労働者はおよそ延べ300万人。一般住民や朝鮮の人々が強制的に動員された。工事は1日3交代徹夜で進められたが、食糧事情が悪く、工法も旧式な人海戦術を強いられたため、多くの犠牲者を出したと言われている。

地下壕は、舞鶴山（現気象庁精密地震観測室）を中心に皆神山、象山の3カ所に碁盤の目のように掘り抜かれ、総延長は10キロメートル余りに及ぶ。

見学できるコースは、象山地下壕の西条口（恵明寺口）から約500メートルの区間。岩に突き刺さったままの削岩用ロッドや掘り出された石などを運んだトロッコの枕木後などの貴重な遺物を確認できる。

壕内は、見学者の安全を確保するため照明や柵、落下防止の支保工などを施している。入壕料は無料。


貴重な遺物の残る壕内を歩く

つきささったままの削岩用ロッド

安全性確保したオリジナル体験

しずおか体験教育旅行

静岡市で体験型プログラムによって小中学生の教育旅行を誘致しようとの機運が高まっている。市内の体験施設、見学施設、宿泊施設などで組織されている「しずおか体験教育旅行」が取り組む。カヌーや地引網、漁港作業、茶摘みといった静岡ならではの魅力あふれる自然、産業などの体験をアピールしている。

体験プログラムは多種多様だが、中でも充実しているのが海洋体験。カヌーやアウトリガーカヌー・ウインドサーフィン、地引網、釣り、などだ。

職業体験で好評なのが由比漁港での漁港体験。早朝に魚をせりで落とし、その魚を使って漁師の指導で漁師料理を作り、朝食として味わう。

静岡の産業として名高いお茶の仕事では、茶摘みと手もみを体験。翌日には、生徒たちが宿泊する宿泊施設に製品になって届けられる。

しずおか体験教育旅行の宮城島史人事務局長は「静岡には歴史、文化、自然のいい素材がまだまだある。今後はシイタケやワサビの収穫、林業などの体験なども加え、生徒たちと地域住民がふれあう機会をさらに増やしたい」と意気込む。

震災後に芽生えた不安感をぬぐうため、6月初旬にオリジナルの避難マップを制作し、行政に先駆けて安全性の確保にも動いた。魅力的なプログラムと安全、安心の受け入れ態勢で小中学校の支持を得たい考えだ。

由比漁港で漁港体験

茶処で茶摘みと手もみを体験

自然と文化の体験を

長野県 ラボランドくろひめ

長野県北部の黒姫山麓に位置する「ラボランドくろひめ」は、10万平方メートルの広さを持つ森林に囲まれたコテージ形式の宿泊施設。自然と地域文化の豊富な体験プログラムを用意する。

ラボランドくろひめの特徴は、林間学校や移動教室、スキー教室など、季節を問わずさまざまなプログラムが組めること。小学校から高校までの教育旅行はもちろん、大学のサークル活動までの幅広い年齢層に対応できるのが魅力だ。2010年度の実績は、東京、埼玉、神奈川、千葉、名古屋などから14校、2100人を受け入れた。

地元インストラクターとの協力体制により、トレッキング、カヌー、野尻湖探検隊、マウンテンバイク、ツリークライミング、スノースポーツなど、四季折々のプログラムが体験可能。敷地内には常設のチャレンジコースもある。グリーンシーズンは、子どもたちが身体的、精神的な冒険に挑戦できるよう、シーソーや綱渡りなどのさまざまなコースを用意。仲間との協力や信頼の大切さを楽しみながら学べるプログラムが充実している。

また、雪深い信州ならではの藁細工などの伝承技術や郷土料理づくり、野外活動などを通じて、地元の人々との交流を深めながら学ぶこともできる。

現在、学校、旅行会社を対象に、無料の試泊キャンペーンを行っている。

森林の中で体験する人気のシーソー

マウンテンバイク

本物体験フォーラム

12月、滋賀県で第8回開催

事例発表や意見交換を通じて体験型観光のあり方を考える「全国ほんもの体験フォーラム」が12月2～4日の3日間、滋賀県で開かれる。「ほんもの体験が日本を元気にする」をテーマにしたパネルディスカッションのほか、課題別の研究分科会、滋賀県内で実施されているプログラムの体験ツアーなどがある。

今大会で8回目を迎える同フォーラムは、地元自治体や関係機関でつくる実行委員会が主催、全国ほんもの体験ネットワークが共催する。

2日、滋賀県立文化産業交流会館で開かれる全体フォーラムでは、滋賀県内の体験現場からの取り組み発表とフォークシンガーの高石ともや氏による記念講演に加え、公開パネルディスカッションが開かれる。公開パネルディスカッションの基調提案とコーディネーターは、体験教育企画代表の藤澤安良氏が務める。

3日の課題別の研究分科会は、米原市、長浜市、彦根市、東近江市、日野町、高島市の6会場で。3日午後から4日にかけては体験ツアーと江・浅井三姉妹博覧会ツアーを実施する。

「トリックアート」の不思議な世界を体験

東京トリックアート迷宮館

お台場に7月オープン

見て、撮って、遊べる美術館

東京・お台場に7月16日、トリックアートの美術館「東京トリックアート迷宮館」がオープンした。平面の絵画が飛び出して見えたり、角度によって全く違う絵に見えたりする不思議な「トリックアート」を展示するユニークな体験型ミュージアム。オープン以来、家族連れや若者を中心に多くの来場者でにぎわい、施設を運営するエス・デー（本社・栃木県那須町）では「東京を訪れる修学旅行のコースに取り入れては」と、旅行会社と学校関係者らに呼びかけている。

ミュージアムはお台場「江戸」を統一テーマに5つのエリアで展開。江戸にタイムスリップした迷路のような敷地内はような感覚でトリックアートを楽しんでもらう趣向だ。作品は手に触れるのも写真に撮るのも自由。常時45のトリックアートを展示しているが、作品は随時入れ替えを行い、何度来ても楽しめるようにしている。

入り口を抜け、まず体験する「江戸エリア」は、江戸の宿場町や町人町を再現したスペース。壁に描かれた「看板娘」はスマートなプロポーションだが、部屋の奥に進んで再び見ると、なぜかふくよかな体型に変身してしまう。高度な技法を使ったトリックアートのひとつだ。「江戸大相撲」は、来場者2人が土俵に上がると、1人の背が極端に大きく、もう1人の背が極端に小さくなって見える。人の錯覚を利用した人気のトリックアート「グッズコーナー」では、ここでしか手に入らないトリックアートの関連グッズを販売する。

「見て、触って、写真が撮れて、遊べるミュージアム」として、独自のエンターテイメント性を築く東京トリックアート迷宮館。作品はこれら常設館ほか、日本各地の企画展で展示され、年間約250万人が見学に訪れている。近年は韓国、台湾、香港、シンガポール、米国でも企画展が開催され、海外でも高い評価を受けている。

▽東京トリックアート迷宮館は東京都港区台場1－6－1、デックス東京ビーチ内4階。☎03・3599・5191。不定休で、午前11時から午後9時まで営業。入場料大人900円、中学生以下600円。

左の人物の背が一見高く見えるが…

見る角度で体の太さが変わる

トリックアートの館

制作工房を併設

那須の直営館も人気

東京トリックアート迷宮館の運営と、トリックアートの企画・制作を行うエス・デーは、栃木県那須町に直営館の第1号「那須とりっくあーとぴあ」をオープンしている。

エス・デーは、トリックアートの第一人者といわれた故・剣重和宗氏（1940～1997）が創設。「美術館は一部の人達のものではない。絵心のある人もない人も、そして大人も子どもも誰もが楽しめるようなもっと身近なものであるべきだ」という創業者の遺志を継承し、「多くの人に絵画への関心を持ってもらう」ことを社是として活動しており、施設では、「感受性の高い中学・高校生に、絵画に触れる楽しみを感じてもらいたい」と、体験イベントなども随時開催している。

▽那須とりっくあーとぴあは栃木県那須郡那須町大字高久甲上ノ台5760。☎0287・62・8388（代表）。年中無休で、午前9時半から午後6時まで営業（10～3月は午後5時まで、8月は午前9時から）。入場料各館大人1300円、小中学生800円（2館、3館共通チケット、団体割引あり）。

お化けや猛獣に食べられているような面白い写真が撮れる

京都 映画のテーマパーク 東映太秦映画村

映像コンテンツ産業を体験

9月、大規模リニューアルオープン

東映太秦映画村では1975年のオープン以来、最大規模となるリニューアルを行う。9月15日には、新しいアトラクション施設「からくり忍者屋敷」や「アニメミュージアム」「浮世絵美術館」などがオープンする。

からくり忍者屋敷は体験型のアトラクション。どんでん返しや隠し通路など、たくさんのからくりを利用して、忍者屋敷の出口を目指す。忍者屋敷の他にも、「手裏剣道場」や「忍者カフェ」、庭園などもある。

アニメミュージアムは、常設展として新設される。多くの人に愛される東映アニメの歴史を貴重なポスターやセル画集などで紹介。アフレコ体験やパソコンを使った塗り絵も楽しめる。

浮世絵美術館は、北斎、歌麿、広重、写楽などの浮世絵復刻画を80数点展示。美人画、役者絵、風景画など体系的に紹介。江戸文化や日本の美に触れることができる。

また、隣接する東映京都撮影所側にも映画村入り口（撮影所口）を新設。個人客用となる（団体客は従来の正面入り口のみ）。

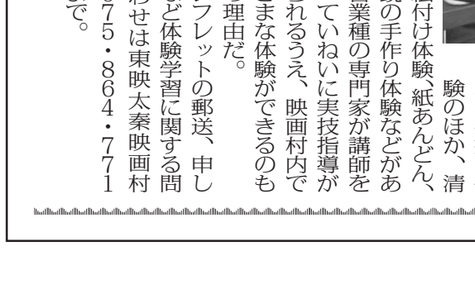
新しい入り口ができたことでJR太秦駅からのアクセスが従来の徒歩13分から5分へと大幅に改善。撮影所口から延びる通路では、実際の撮影に使用されている小道具などが展示され、撮影所の雰囲気を味わうこともできる。

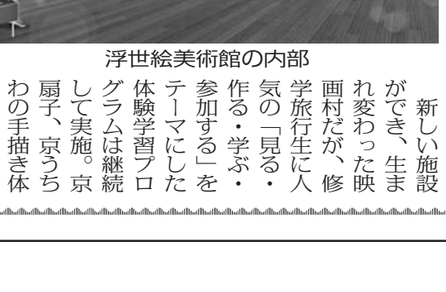
今回の大型リニューアルは、京都府が進める、太秦周辺を映像コンテンツ産業の拠点とする「京都太秦メディアパーク構想」の一環で行われる。JR太秦駅も今後、装飾を施して映画の街らしい駅に改修される。

東映太秦映画村は、時代劇のオープンセットを公開する、日本初の映画のテーマパーク。劇場映画やテレビの人気番組の撮影、日本映画の貴重な資料を見学できる。映画ファンや家族連れ、修学旅行生など幅広い層から根強い人気がある。

新しい施設ができ、生まれ変わった映画村だが、修学旅行生に人気の「見る・作る・学ぶ・参加する」をテーマにした体験学習プログラムは継続して実施。京扇子、京うちわの手描き体験のほか、清水焼絵付け体験、紙あんどん、万華鏡の手作り体験などがある。各業種の専門家が講師を務め、ていねいに実技指導が受けられるうえ、映画村内でさまざまな体験ができるのも人気の理由だ。

パンフレットの郵送、申し込みなど体験学習に関する問い合わせは東映太秦映画村（☎075・864・7716）まで。


撮影所口（発券所・ウェルカムゲート）


からくり忍者屋敷の内部

浮世絵美術館の内部